

# BUỔI 04

**Sử dụng câu nghi vấn  
để đưa ra vấn đề**

**Luyện tập****問題 13 :**

今の日本人の欲望は留<sup>とど</sup>まる<sup>ところ</sup>を知りません。常に新しい物を欲<sup>ほ</sup>しが<sup>る</sup>。美味<sup>おい</sup>しい物ばかりに目移<sup>め</sup>りする。身の安<sup>やす</sup>い、以上の生活を求め続けている。そして子供には過<sup>か</sup>度の期待をかけ、能力以上の成果を望<sup>のぞ</sup>む。果たしてそこに本当の幸福があるのでしょうか。

ほんのつい最近まで、日本人は身の丈に合った慎<sup>つつし</sup>ましい(#2)生活を送っていました。少なくとも私が幼少<sup>ようしょう</sup>の頃はそうでした。背伸びをすることなく、不満を口にすることなく、慎<sup>つつし</sup>ましい暮らしの幸<sup>しあ</sup>せを感じていました。

かつてのような貧<sup>ひ</sup>しい暮らしが良いというわけではありません。ただ、身の丈に合わない生活には、きっと大きな落<sup>お</sup>とし<sup>あな</sup>穴<sup>あな</sup>がある。そんな気がするのです。

問い：この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

1. 昔は貧<sup>ひ</sup>しかったが、今は欲しい物が何でも手に入り、現代の日本人は幸福である
2. 少し前まで日本人は貧<sup>ひ</sup>しい暮らしをしていて、あまり幸福とは言えなかった
3. 今の日本人は背伸びして良い生活を求めているが、それでは幸福になれないだろう
4. 筆者が子供の頃は、自分の生活に満足しながら生活していて、幸福だった

## 問題 14 :

みなさんは、そもそも何のために文章を書くのでしょうか。

もし、私自身が同じ質問を受けたら、「自分を表現し、他者と関わりながら生きていくため」と答えます。学校の教科書や参考書をいくら読んでも、それだけでは他者との関わりは生まれてきません。知識として知ることと他者と関わるということは、質的に全く別次元のことだからです。知識をいくら積み重ねても、他者と関わることは永遠にできないでしょう。

理解し感動したことや一生懸命に考えたことを、拙くてもそういいから、試行錯誤しながらでもいいから、誰かにきちんと「伝える」練習をしてみましょう。それは、きっと社会に働きかけ、他の人々と共に生きていく練習にもなるでしょう。「書く」という行為は、静かに自の内面を見つめることでありながら、同時に社会に向けて行動する第一歩にもなり得るのです。

問い：この文章の内容として最も適切なものはどれか。

1. くときには「何のために文章を書くのか」をよく考えることが大切だ
2. 書くことは、誰かにきちんと「伝え」、社会に向けて行動することにつながる
3. 教科書や参考書で勉強しても、知識が増えるだけで、書くことは上手にならない
4. 書くことによって人は成長し、自分の内面を見つめられるようになる

## 問題 15 :

日本で生活している留学生の多くが、「日本人は家族の関係が薄い」という感想を抱くようだ。一人暮らしをしている大学生があまり家族と連絡をとらないことや、老人ホームなどの施設で暮らすお年寄りが多いことなどから、そう感じるらしい。「経済が発展した結果、昔は強かった家族の人間関係が、だんだん薄く、冷たくなったのだ」という意見もよく聞く。本当にそうなのだろうか。

ある全国調査によると、「あなたにとって何がいちばん大切ですか」という質問に対して「家族」と答えた人の割合は、1978 年が 23%、1988 年が 33%、1998 年が 40%、2008 年が 46%だった。家族がいちばん大切だと言う考えの人が 30 年で倍になったことがわかる。

一方、「職場の同僚とのつきあい」「隣近所の人とのつきあい」「親せき」について、「相談したり助けあったりできる関係」にあることが望ましいかどうかを聞いたところ、すべての項目において、「望ましい」と答える人の割合は減少傾向にあった。

問い：この文章の内容として最も適切なものはどれか。

1. 職場や地域、親せきとのつきあいは薄れているが、家族関係を重視する人の割合が高まっている
2. 経済発展をしても、家族関係や、職場や地域、親せきとの関係の強さはあまり変わっていない
3. 年とともに、職場や地域、親せきとの関係は強まりつつあるが、家族を大切に思う人の割合は増えていない
4. 家族関係だけでなく、職場や地域、親せき関係を重視する人の割合もすべて低下してきている

## 問題 16 :

目の前の相手が悲しんでいるとき、その自分の感情を思い出していただきたい。<sup>どうじょう</sup>同情とか、<sup>きょうかん</sup>共感とか、力になってやりたいといった気持ちが起こるだろう。また、人に親切にしたときや贈り物をしたときなど、相手がうれしそうな表情やしぐさをして、喜んでいるとわかれば、自分もうれしくなるだろう。このようにして相手の感情がわかり、それに対して共感する気持ちが生まれれば、それは相手に対する好感情につながる。

だが、喜んでいるのか悲しんでいるのか、さっぱりわからない人の場合はどうだろうか。その人にどう<sup>せつ</sup>接していいかわからず、共感する気持ちもわからない。なんとなく<sup>けいえん</sup>敬遠(したくなるのではないだろうか。(中略)

とくに若い世代は、感情を表にあらわさない人に対して、「わからない人」という<sup>ひょうか</sup>評価を下し敬遠しがちだ。そのため、人と話すときに自分の感情をうまくあらわせない少年少女は、クラスメートたちから<sup>なかま</sup>仲間はずれにされやすく、ときにはいじめられっ子になったりもする。感情をうまく表にあらわせない人は、対人関係が悪くなりやすいのである。

問い：この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

1. 相手の感情がわからない人は、仲間はずれにされたりいじめられたりする
2. 自分の感情を相手に対して上手に出していけば、良い人間関係を作りやすい
3. 目の前にいる人が自分の気持ちに共感してくれないと、その人との関係が悪くなる
4. 感情を表に出さない人より、表に出す人のほうが人間関係で問題が起きやすい